

吉本敏男さん
(後免町)

薬局店経営者の吉本さん(78歳)、このほど自叙伝「回想録—思い出の記」を自費出版しました。



高橋真理子さん
(白木谷)

ママさんバレーボールチーム「白木谷ちばな」のキャプテンを務める高橋真理子さんを紹介します。



もうバレーボールを始め、もう十年以上になります。矢心知れた人ばかりで、楽しくやっていますよ。でも、やるからには勝ちたいですね。今までは、成績はあまり良くなかったんですが、今年はその大会で上位に入り、みんな喜んでいきます。最初白木谷へ嫁いできたときは、田舎だなあと思いました。でも、住んでみるとなかなかいい所ですよ。若いお嫁さん、白木谷に来て、私たちと一緒にバレーボールを楽しませてください。

目を悪くしたのがきっかけになり、元気がうちに自分の生きざまを振り返ってみようと、書き始めました。書き出したら思い出がついこの間のことのように次々とよみがえってくるんです。内容は自分の少年時代から現在まで、それに南国市誕生に関する裏話なども。趣味は「カメラを持って」の旅行。もっぱら妻と二人でします。本の中の写真は全て自分で撮ったものばかり。家中アルバムだらけなんですよ。

戦後の解放運動・教育・行政が どのように行われたか ⑤

同和教育への出発①

全国的に同和教育への模索がはじまるなかで、一九五一年(昭和二六)年高知県教育委員会には「同和教育研究指定」制度をつくりました。この年は、長岡郡長岡村など七市町村が研究指定を受けました。この指定制度は三年間続きましたが、校区に部落があり福祉教員のいる一部の地域や学校を除くと、同和教育どころか部落問題についての研究さえしていませんでした。当然のように各学校現場で差別事件が起こりましたが、中でも春野村弘岡中学校の差別事件は、県下の教育界を揺るがせる大きな問題を提起しました。

一九五七(昭和三二)年一月二一日、弘岡中学校は流感による休校を決定した午後五時頃、飲酒の席から数名の教員が職員室の大火鉢を囲んで雑談をしていました。このとき、酒に酔ったS教諭が突然Y教諭に「コラッ、中ノ村の〇〇先生」と、賤待語をあげせました。Y教諭は憤然として運動場へ出ましたが、ちょうどクラブ活動で残っていた南部の部落出身の生徒たちがY先生に気づいて集まってきました。Y教諭は、「先刻S教諭から差別を受けた。お前たちもしつかりせんといかん」と涙ながらに話しました。

同和教育シリーズ

その時、帰宅のため外にでたS教諭を見つけた南部の生徒たちが、「先生がそんなことを言っていていいですか」と抗議すると、S教諭は再び悪質な差別発言をくり返しました。生徒たちは「ぼくらの部落へきて、そんなことを言う言いますか」というと、「言わいじや」といって、生徒たちといっしょに南部の部落までいき、差別言辞を連発しました。

事態を重視した南部の人たちは会合をもち、「S教諭を直ちにやめさせよ」「学校は同和教育に取り組み」なレソを決議し、差別教育追及の体勢を整えました。

一方、生徒たちは自主的に南部生徒会を開き、次のような決議をしました。

私たち、弘岡南部の中学校生徒一同は、この度のS先生の差別問題にたいしてこのまま済ます事は出来ませんので、次の様な決議を致します。

一、S先生及びその他差別をするような先生に教育を受けることは出来ません。

一、私達のこの望みがかなわない時は同盟休校を行います。

この決議を、翌日の二五日学校長に手渡し、三一日までに回答することを約束させました。

しかし、事の重大さに驚いた学校や教育行政は、約束の三一日には結論が出せないまま、翌二月一日を迎えました。